

## 王権と宗教施設

——クメール王国とチョーラ朝の大寺院造営——

### はじめに

ヒンドゥー寺院やモスクのような宗教施設は元来非政治的なものであるが、歴史的には、しばしば政治権力、特に王権と結びつくことによって、すぐれて政治的な支配の装置としての役割を果たしてきた。本稿では、ほぼ同時代に南アジア世界で繁栄した、南インドのチョーラ (Chola) 王朝とカンボジアのクメール (Khmer) 王朝における大寺院の造営を例にとりあげ、それぞれの地域における政治権力、特に王権のありかたが、寺院の性格にどのように反映しているかを比較検討する。

### アンコール王朝の寺院造営

インド文明の影響を受けた東南アジアの様々な地域で、数多くの、ヒンドゥー教や仏教の寺院が造営されてきたことはよく知られている。特にインドネシアやカンボジアでは、もともとの起源

小倉 泰

であるインドの寺院をしのぐ荘大な宗教建築が造られている。そのなかでも、九世紀から十三世紀にかけて繁栄したクメール王朝は、大寺院の造営に多大なる精力を傾けたことで有名である。たとえば、十二世紀前半にスリーヤヴァルマン (Suryavarman) 二世によって造営されたアンコール・ワットや、十二世紀後半にジャヤヴァルマン (Jayavarman) 七世によって造営されたアンコール・トムといった宗教都城は特によく知られているが、アンコール遺跡と呼ばれる寺院群は、トンレサップ湖の周辺に現存するものだけでも数百を下らない。

アンコール建築の頂点に立つアンコール・ワットは、広大な境内のなかに、ピラミット状に幾重にも基壇を施し、三重の回廊に囲まれた中央の伽藍には、五つの祀堂がそびえたっている。その外側には幅二〇〇メートル近い環濠が周らされている。建築全体の構想としては、インド起源の宇宙観において世界の中心山とされる須弥山を模したものである。一一二三年に即位したスリーヤ

ヴァルマン二世は、即位後すぐに工事に着手し、約三〇年の後に完成させている。最盛期には、この大宗教都城の人口は一五万人を越えていたといわれている。<sup>(1)</sup>

「山岳寺院」形式と呼ばれるこの寺院の様式は、アンコール・ワット以前にさかのぼり、規模はアンコール・ワットには及ばないものの、同様の構想の寺院が、九世紀頃から、クメールの王都の中心に築かれてきた。すなわち、現在のシエムリアップ市内から一三キロ東のロリュエオス遺跡群(後のハリハラアラーヤ)にあるインドラヴァルマン (Indravarman) 一世(在位八七七一—八八九年)の時代の、バコン寺院(八八一年)やブリア・コー寺院、ヤショーダラヴァルマン (Yasodharavarman) 一世(在位八八九一—九一〇年頃)による第一次アンコール王都ヤショーダラブラ (Yasodharapura) の中心に位置するブノン・バケン (Phnom Bakheng) 寺院(九世紀末)などがそれである。また、ラージエンンドラヴァルマン (Rajendravarman) (在位九四四—九六九年)の時代の、東メボン寺院 (Mebon) (九五二年)、プレール寺院 (Preloup) (九六一年)、さらにバプーオン (Bapouon) 寺院(一一世紀)などもその範疇に入れることができる。

これらの「山岳寺院」には、中央の祠堂のなかに、王の名前を付した特別の偶像が祀られていたが、この習慣は、アンコール時代の幕開けとなったジャヤヴァルマン二世(在位八〇二—八三四年)の登位の時に行われたという儀礼にさかのぼる。このとき、王は、首都の北方にあるブノン・クレーンの丘陵をマヘーンド

ラ・バルヴァタ (Mahendraparvata = 「インドラ神の山」)とみたて、当時ジャワ(シュリー・ヴィジャヤ王国)の勢力のもとにあったカンボジアを再統一する願いをこめて、ヒラニヤダーマ (Hiranyadama) という名のバラモンを招請し、デーヴァラージャ (Devataja = 「神である王」) と呼ばれる儀礼を行って、王の神格化を確認し、その権威を国内に浸透させようとしたといわれている。<sup>(3)</sup> この時の儀礼はシヴァ・カイヴァリヤ (Sivakavalya) というバラモンの一族に代々継承され、新王が即位して新たに王国の首都が移されると、その儀礼は、その首都の中心に新たに築かれた寺院で繰り返されたという。<sup>(4)</sup>

一見すると、インドから伝えられたヒンドゥー教の枠組みのなかで形成されたかに見えるこの習慣は、実はインド、特に北インドには明確な根拠を見い出せない。北インドでは、理論上は、有名な『マヌ』法典に、王権の起源を神から授けられたものとする記述が見られるが、この考え方は仏教の資料からは支持されていない。また碑文資料をみても、西アジア起源のクシャーナ朝の王たちの例外を除けば、王の神格化は俗信のレヴェルを越えたことはなかった。<sup>(5)</sup> 恐らく、クメールのこの習慣は、もともと農業神や水の精の信仰と重層して神格化されていた王への信仰を、祖先崇拜とあわせてデーヴァラージャ(神王)の信仰として組織し、王の権威を王国のなかに浸透させようとした権力者の意図を表現したクメール独特のものと考えられてきた。

ところで、このように王を神と同一視し、王が神であることに

王権の正統性根拠を見いだす考え方は、インド文化の影響を強く受けた東南アジアに広く見い出せる。早くも四五〇年には、西部ジャワのプールナヴァルマン (Puravarmān) 王の足跡は、ヴィシュヌ神の足に例えられて、民衆に信仰されていた (Sarkar 1985: 139)。また、王の灰を埋葬した寺院も珍しくないが、そこでは、生前の王の似姿に作られた神像が祀られていた。東部ジャワのエルランガ (Erlangga) 王 (在位九九一—一〇四九?) の像は、ガルダに乗るヴィシュヌ神の姿で表現されている (Coomaraswamy 1965: Fig. 360)。さらに十四世紀に至っても、東部ジャワを中心に絶頂期を迎えたマジャパヒト (Majapahit) 王朝の王統譜『クリタナーガラアラーガマ (Kratāgarāgama)』では、マジャパヒト王朝のすべての王は、シヴァ神の化身とされている (千原 1982: 343)。いずれも、王に対する土着の信仰が「インド的」な表象を用いて表現されたものである。こうした「神としての王」の側面を強調する思想が、祖先崇拜や山岳信仰を中心とする東南アジアの基層的信仰に深い根をもっていることは、現代のカンボジアの元首やタイの国王などもつかりスマ性にも窺えるかもしれない。

アンコールの諸寺院は、王の信仰するヴィシュヌ神やシヴァ神に奉納されたものだが、同時に、本殿には神々の姿に似せた王の肖像がおかれ、また、王自身の壮大な墓廟とすることも意図されていた。寺院のなかからは王の亡きがらを納めたと思われる棺が発見されているが (Coedes 1933; 1940) これらの寺院が、イ

ンド的な寺院としては例外的に、共通して西側に面していることも、王の墓廟としての性格を表わしたものと考えられている。大宇宙を模した地上の宗教都城を中心としたアンコール遺跡にはつきりと現われているのは、生前死後を問わず、大宇宙の中心に座す「地上における神」という、王の神格化への徹底した意思であるということができる。

#### チョーラ朝の寺院造営

従来、東南アジアのデーヴァラージャ思想の起源はインドにあると漠然と考えられてきた。しかし、改めてカンボジアのそれに対応するものをインドに探してみると、それはインドに普遍的に見られるような思想ではないことが明らかになる。王の神格化の装置について、北インドは東南アジアとほとんど共通のものを持っていないが、アンコール朝とほぼ同じ時期の南インドのチョーラ朝に、いくつかの共通要素を見出すことができる (小倉 1982)。

アンコール・ワットの造営とはほぼ同じ十二世紀初頭に、チョーラ朝のラージャラージャ (Rājājā) 一世 (在位九八五年—一〇一四年) は、首都タンジャール (Tanjavur) に、巨大なラージャラージェーシュヴァラ (Rājāśvara) 寺院を造営している。この寺院は、アンコールワットと同じく須弥山を模したもので、縦約二四〇メートル、横約一二〇メートルの敷地の中央にいくつもの回廊に囲まれて聳えるヴィマーナ (vīmāna 本殿) の高さは、六〇メートルを超え、アンコール・ワット以前では世界

最大の寺院であった。

この威圧的な大建造物は、それ以前のチョーラの寺院が、規模も極めて小さく、個人的な寺院の印象を免れないのと、はっきりとした対照をなしている。また、それ以前の寺院が、それぞれタミルの伝統的な聖地に建てられているのに対して、この寺院は宗教聖地とは無関係に、王の意思によって、首都という全く新しい場所を選んで建設されたものである。そしてガルバグリハ (Garbhagrha = 聖域) には、造営者ラージャラージャ一世の名を付した巨大なリング (シヴァ神を象徴した男根) が祀られていた。リングを祀るガルバグリハの周囲の回廊には、ラージャラージャ一世や后たちの肖像や彫刻が飾られ、内壁を飾る壁画や外壁を飾る彫刻には、トリプラーンタカ (Tripuranaka = 「羅利たちを征服したシヴァ神」) のモチーフが好んで描かれている。戦車に乗って悪魔と闘うシヴァ神の姿は、ラージャラージャ一世の軍事的偉業の象徴として好まれたものとも考えられている。また毎年の祭礼には、王の歳費によって維持された劇団によって「ラージャラージャナータカ」(ラージャラージャの芝居) と呼ばれる芝居が上演されたし、十二年ごとの寺院の大祭は、ラージャラージャ一世の誕生月におこなわれたともいわれている (Balasubrahmanyam 1977; Venkatarman 1985)。

このラージャラージャエーシュヴァラ寺院は、続くチョーラの王たちによる大寺院造営の端緒を開いた。ラージャラージャ一世の息子ラージュエーンドラ (Rajendra) 一世 (在位一〇二二—一〇四四

年) は、タンジャール川の北方に新たな首都ガンガイコンダ・チョーラプラム (Gangaicondolapuram = 「ガンジス川まで侵攻したチョーラ王の都」) を建設し、その中心に父王のラージャラージュエーシュヴァラ寺院とほとんど同じ様式の大寺院を造営している。その寺院はやはり王自らの名をとって、ラージュエーンドラ・チョーリーシエヴァラ (Rajendracolisvara) と命名されている。さらに、ラージャラージャ二世 (在位一一四六—一一七二年) は、その首都ダーラーシユラム (Darasram) にラージャラージュエーシュヴァラ寺院を、クロットツンガ (Kulottunga) 三世 (在位一一七八—一二一八年) は、その首都トリプヴァナム (Tribhuvananam) にトリプヴァナ・ヴィーレーシエヴァラ (Tribhuvana-viresvara) 寺院を、としように、それぞれの首都の中心に、ラージャラージュエーシュヴァラ寺院と同じ形式の大寺院を競うように造営して、帝国の權威を誇示した (Srinivasan 1983a : 1983b)。これらの寺院も、やはり、王の名前とシヴァ神の名前を重ね合せたリングを主尊に祀っている。したがって大寺院という装置の外面としては、チョーラ朝の大寺院も、クメールのそれと非常に類似しているのである。

しかし、これらの寺院では、生前の王がクメールのような形で神格化されるようなことはなかった。王の名を付したリングや王の肖像画などの存在にもかかわらず、碑文資料を見るかぎり、生前のラージャラージャ一世が、積極的に自らの神性を宣伝した形跡は見あたらない。ラージャラージュエーシュヴァラ寺院が、バラ

モン教の枠組を破ってまで、王の墓廟となることも決してなかったことは、さらに重要である。<sup>(6)</sup>もちろん、これらの道具立てが、「王は神のごとき存在である」という民衆のもつ素朴な感情に訴えた効果には少なからぬものがあつたことは想像できるし、帝国の権威の象徴としての意味は大きかつたことは間違いない。

しかし、ラージャラージャー一世にとって、ラージャラージャーシュヴァラ寺院の造営は、王権の神格化のための大道具の設営というより、きわめて実質的な関心をはるかに優越していた。そのことは、この寺院を中心にした王の経済政策からも明らかである。すなわち、この寺院には王の命令によって莫大な租税や労働力が集められ、土地の寄進が集中している。そしてその結果として、王朝の経済的基盤は固められ、首都を中心としたチョーラ朝の経済の核が創出されたのである (Spencer 1969)。ラージャラージャーの主體的な政策を検討する限り、彼にとってのこの寺院は、いまだに脆弱な王国の基盤を固めるための、実際のな支配の装置だったのである。そして、そうした事情は、続く王たちが建立した寺院にも、かなりの程度まで共通している。

### 小結

クメールとチョーラを比べてみると、ほぼ同じ時代に、ヒンドゥー教という同じ宗教の表象を用いながら国家的な大寺院の造営が行われている。それはさまざまな面で共通点を示しているにもかかわらず、寺院を軸にした王の神格化という面で、両者のあい

だに強調点が相違しているのはなぜだろうか。

インドの正統ブラフマニズムの枠組みのなかでは、王はきわめて早い時代に司祭者としての性格を失い、世俗の権力とひきかえに、あくまでもバラモンに従属し、相互依存の関係にあつたから (Dumont 1970)、王の神格化という方向とは矛盾する。したがって北インドでの王の神格化が、西アジア起源のクシャーナ朝などの例外を除いて、ほとんど俗信のレヴェルにとどまっていたことは、正統ブラフマニズムによる制約の結果と考えることもできよう。そうした北インドの正統ブラフマニズムの影響は、チョーラ朝よりひとつ前のパッラヴァ朝の時代から次第に南インドに及んでいたが、チョーラ朝の時代には、南インド社会の隅々にまで根を降ろし始めていたといわれている (Nilakanta Sastrî 1966)。この時代にはガンジス中原から続々とバラモンが南下し、なかには、チョーラの王たちのラージャプローヒタ (Rajapuruhita II 「王付きのバラモン」) として、国家の政策に深く関与した者たちもあつた。<sup>(7)</sup>

セデスが「先アリア文化」と名付けたように、北インドと比較した場合、巨石文化や根強い祖先崇拜の強さなど、南インドの宗教風土が、東南アジアと多くの共通点をもつことはしばしば指摘されている。実際に、チョーラ以前のパッラヴァ朝から、南インドは、クメールと同じ形で王の神格化が進む要素を多々示している。しかし実際には、チョーラ朝で、クメールほど顕著な形でそれが進行しなかつたのは、恐らく、この正統ブラフマニズム

の影響を考慮することなしには不可能であろう。つまり、北インドほど強くはなかったにせよ、正統ブラフマニズムの影響のもとで、チョーラの王の神格化には強い抑制が働いていたのである。一方、南インドと同じように、土着の文化の上にバラモン教の枠組みを受け取ったカンボジアには、当然のことながら、強力なバラモン層は存在しなかった。また、王にかわる権威を担える社会層も存在しなかった。そこでは、王の神格化に制約を与えるものはなにもなかった。その結果、クメールの王たちの造営した寺院は、まさに王権に奉仕し、王の神的権威を高揚することだけのために用いられたのである。

注

- (1) アンコールワットについては、すでに戦前からフランス極東学院 (Ecole française d'Extrême-Orient) によって膨大な研究が蓄積されている。歴史を中心としては、セデス、美術、建築については、ステルン (Philippe Stern) の研究が重要であるが、とりあえず概要を把握するには、セデス (Coedes 1947) が便利である。
- (2) クメールの山岳寺院の形式や意味については、フィリオザ (Filliozat 1954)、ステルン (Stern 1934) などを参照。
- (3) ただしこの儀礼について記しているのは、ジャヴァルマン二世の時代よりはるかに時代の下る一〇五二年の、Sdok Kak Thom の碑文である。この碑文は現在、バンコクの国立文書館に保管されているが、テキストは、Coedes and Dupont 1943-46) のなかに収録されている。

- (4) この点については、デーヴァラーシャと呼ばれる、王の名前を付したリングガが、新たな首都を点々と移動したという解釈もある。この「デーヴァラーシャ」という言葉のように解釈するかは、非常に困難な問題を含んでいるが、アンコール研究に金字塔をうちたてたセデスによる、「神王」という解釈が、クメールの統治原理を理解するキーワードとして、長いあいだ通用してきた (Coedes 1952)。近年、この解釈に対して、フィリオザ (Filliozat 1960)、クルケ (Kulke 1974: 1978) が新しい解釈を提示しており、晩年のセデスも一部フィリオザの見解を受け入れている (Coedes 1970)。デーヴァラーシャの研究史、および問題点については、マブベット (Mabbett 1969) を詳し。
- (5) インドにおける王権の神格化の問題については、最近山崎元一教授が研究を進めている (山崎 1992: 1993a; 1993b; 1993c)。また (小倉 1992) も参照。
- (6) チョーラ朝の初期から、パッディパダイ (Pallipattai) と呼ばれる、死者を埋葬した寺院がいくつか記録に残されている。その意味で、やはりタミル・ナードゥでも、寺院は祖先崇拜と習合した形跡があるが、重要なことは、ラージャラーシャ一世などの王たちが首都の中心に造営した大寺院は、決して墓廟としての性格をもたなかったことであり、その点で、クメールの王たちの寺院造営とは、はっきりと異なっているのである。
- (7) ラージャラーシャ一世とラージェンドラー一世につかえた、イーシャーナンヴァパナンディタ (Īśāṅśvapaṇḍita) は特に有名である (Srinivasan 1983a: 232)。

佛像外傳

- Balasanbuhmanyam, S. R. (1977). *Middle Chola Temples, Rajaraja I to Kalottunga I* (A. D. 985-1079). Amsterdam, Oriental Press BV.
- Coedès, G. (1933). "Angkor Vat, Temple ou Tombeau." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*. XXXIII: 303-309.
- \_\_\_\_\_. (1940). "La Destination funéraire des Grands Monuments Khmers (Études Cambodgiennes, XXXIII)." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*. XL: 315-343.
- \_\_\_\_\_. (1947). *Pour mieux comprendre Angkor: cultes personnels et culte royal, monuments funéraires, symbolisme architectural, les grands souverains d'Angkor*. Paris, A. Maisonneuve.
- \_\_\_\_\_. (1952). "The Cult of Deified Royalty, Source of Inspiration of the Great Monuments of Angkor." *Art and Letters* XXXVI, pt. 1: 51-53.
- \_\_\_\_\_. (1970). Le véritable fondateur du culte de la royauté divine au Cambodge. *R. C. Majumdar Felicitation Volume* Calcutta, Firma. 56-66.
- Coedès, G. and P. Dupont (1943-46). "The stele of Sdok Kak Thom." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* XLIII (1943-46): 57-134.
- Coomaraswamy, A. K. (1965). *History of Indian and Indonesian Art* New York, Dover Publications.
- Dumont, L. (1970). The Conception of Kingship in

Ancient India. *Religion, politics and history in India* Paris/The Hague, Mouton. 62-88.

Filliozat, J. (1954). "Le Symbolisme du Monument de Phnom Bakheng." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient*. XLIV, pt. 2: 527-554.

\_\_\_\_\_. (1960). *Sur l'esprit de la civilisation khmère* Phnom Penh, Lecture.

Kulke, H. (1974). "Der Devarāja-Kult. Legitimation und Herrscherapothese im Angkor-Reich." *Saeculum* 25 (1): 24-55.

\_\_\_\_\_. (1978). *The DevarājāCult* New York, Department of Asian Studies, Cornell University(上編(佛像)).

Mabbett, I. W. (1969). "Devarāja." *Journal of South-east Asian History* X, Number 2: 202-223.

Nilakanta Sastri, K. A. (1966). *A History of South India from Prehistoric Times to the Fall of Vijayanagar*. Bombay, Oxford University Press.

Sarkar, H. B. (1985). *Cultural Relations between India and Southeast Asian Countries* New Delhi, Motilal Banarsidass.

Spencer, G. W. (1969). "Religious Networks and Royal Influence in Eleventh Century South India." *Journal of the Economic and Social History of the Orient* XII (part 1): 42-56.

Srinivasan, K. R. (1983)<sup>a</sup>. *Colas of Tañjāvūr: Phase II. Encyclopaedia of Indian Temple Architecture, South India, Lower Drāviḍadeśa* 200 B. C.-A. D. 1324 Delhi,

American Institute of Indian Studies, Oxford University Press.

Srinivasan, K. R. (1983)<sup>b</sup>. Colas of Tanjāvūr : Phase III. *Encyclopaedia of Indian Temple Architecture, South India, Lower Drāviḍaśā* 200. B. C. -A. D. 1324. Delhi, American Institute of Indian Studies, Oxford University Press.

Stern, P. "Le Temple-Montaigne Khm̄r-Le Culte du Linga et le Devarāja." *Bulletin de l'École française d'Extrême-Orient* XXXIV: 611-615.

Venkataraman, B. (1985). *Rājārājeshvaram-The Pinnacle of Chola Art* Madras, Mudgala Trust.

小倉泰 (1992). 「タミル・ナードゥに於ける王権と寺院—王の神格化をめぐる—」『東洋文化研究所紀要』118: 87-125°

千原大五郎 (1982). 「東南アジアのコンクェーター・仏教建築」鹿島出版会。

山口元一 (1992). 「古代インドの王権—インドゥター法典類を史料として—」『国學院大学紀要』30: 85-117°

同 (1993)<sup>a</sup>. 「『ビンダーナタ』の王権論—シャーンタ・マニヤンとの記事の検討—」『国學院雑誌』94(2): 21-42°

同 (1993)<sup>b</sup>. 「古代インドの王権論—仏典と『実利論』を史料として—」『東洋文化』73: 1-39°

同 (1993)<sup>c</sup>. 「古代インドの王権—四王の碑文を資料として—」『国學院雑誌』94(6): 40-56°